令和８年度第１回秋田県立図書館協議会　要旨

１　開催日時：令和８年１０月２７日（火）　午後１時３０分～午後３時

２　会　　場：秋田県立図書館　３階多目的ホール

３　出 席 者：会　長　高橋　秀晴
委　員　利部　久孝
〃　菊地　真理
〃　藤原　孝一
〃　伊藤　ひろみ
〃　武藤　奈津希
〃　川越　よし子
〃　村山　喜宏
〃　三戸　忠洋
〃　霜鳥　秋則
事務局　内田　鉄嗣　教育庁生涯学習課長
青谷　　忍　　〃　　社会教育・読書推進チーム主査
関谷　洋之　秋田県立図書館長
成田　亮子　　〃　　副館長(兼)サービスチームリーダー
小山田　希　　〃　　主任図書専門員(兼)企画・広報チームリーダー
嵯峨　　進　　〃　　副主幹(兼)情報チームリーダー
貝田　晴絵　　〃　　副主幹(兼)図書資料チームリーダー
田口　さゆり　　〃　　副主幹(兼)総務チームリーダー
千田　育栄　あきた文学資料館　主査

４　議事概要
（１）開会
（２）委員紹介
（３）事務局職員紹介
（４）生涯学習課長あいさつ
（５）図書館長あいさつ
（６）報告

■表記について（●：委員、→：事務局）

①　令和８年度秋田県立図書館の活動状況について　（館長及び各チームリーダーから説明）

●９月末時点の来館者の減少について、前年度比の減少幅７％は大きいと思う。企画展の開催の有無だけが要因ではないのではないか。読書離れやＡＩ活用の増加なども関連があるのではないか。

デジタルアーカイブについて、デジタル化していく資料に優先順位があるのか、画像が見られる資料は何点あるのか、また、貴重資料の画像のデータ化は今後どのようにしていくのか、教えていただきたい。

→ デジタルアーカイブについては、当館内部でデジタル化方針があり、権利関係が切れているもの、明治初期や江戸時代のものをまずは中心に行うこととしている。あとは、社会的ニーズや希少性が高いもの、酸化が進んでいて保存処理が求められているものなどを優先的にデジタル化している。また、閲覧者の関心を引くような、見て楽しんでもらえるような資料を優先的にデジタル化していきたいと考えている。

今後については、このような条件を踏まえて、どの資料を優先的に進めるか検討していくが、話題性の高いもの、例えば最近ＮＨＫで取り上げられた「うつろ船」に関する資料など問い合わせが増えているものがあるのでそちらのデジタル化も進めていきたいと考えている。

61 万点のうち画像が見られる資料は、令和７年度末時点で 2,183 点である。それ以外は秋田魁新報の見出し検索や雑誌の目次検索などの索引類が多くなっている。

●デジタルアーカイブには色々な可能性があると思うので、予算的に難しいかもしれないが画像のデータ化をがんばってほしい。

●来館者の減少についてはいかがか。

→企画展が前年度同時期に比べて１回少なかったこともあるが、委員も言われたとおりＡＩの利用やデジタルアーカイブなど非来館型の利用が増えていることも日々感じている。実際に、ＡＩで調べてきた上で図書館を利用する人が増えており、図書館を利用せずにＡＩで済ませている人も増えてきているのではと推測される。そういったことも来館者の減少に繋がっているのではと考えている。

●デジタルアーカイブでの公開が進むと、図書館に来館する必要は当然なくなっていく。デジタルアーカイブを進めることが、来館者減少に繋がるということではデジタルアーカイブを進めて行っていいのかという話になってしまう。例えば、デジタルアーカイブの閲覧数を来館者数にカウントするなど、カウントの仕方、考え方を工夫してもいいのではないか。

●資料受入実績の寄贈資料について、どういう人が寄贈しているのか。大学の先生などは貴重な資料を多く持っているので、そういった方々に対して図書館から寄贈の働きかけなどをしてはいかがか。

→個人出版や国の刊行物、また最近は実家の整理で出てきた本など、寄贈の申し出は多くいただているが、収蔵能力にも限りがあることから、秋田県に関する郷土資料を中心に寄贈を受入している。そのため、大学の先生には貴重な資料をお持ちの方もいらっしゃると思うが、そちらについては所属されている大学の方で保存していただければと思う。

郷土資料以外については、国で刊行していると統計などを中心に受け入れており、それ以外については、当館の図書選定委員会で協議して受入している。

●寄贈の申し出を待つだけではなく、積極的に寄贈に向けて動いてはどうかという意見に対してはいかがか。

→ご意見を踏まえて、寄贈に関する周知についてもっと工夫できるのではないかと思った。図書館ではこういった資料を求めていますということをＳＮＳ等を活用して、積極的に周知して参りたい。

●郷土資料の受入について、重複するものがあった場合はどうなるのか。

→本の状態を見ながら、重複しているものについてはこちらで処分を一任していただいた上で受入を行っている。重複していても、所蔵しているものよりも状態が良いものや、今後どうしても手に入らない希少価値の高いものについては、ストックとして受入しているものもある。

●購入図書冊数が減っているが、予算が減っているのか。

→予算については、最近の物価高に応じてその分多少上乗せされている。しかし、書籍、雑誌ともに単価がここ数年で前年比 102～104％ほどに上がっており、今後も値上がりする可能性があることから、それを見越して慎重に購入を行っている状態である。そのため、数字として冊数が減っているものである。

② 図書館利用者アンケート結果について（副館長より説明）

●来館者数が減ってきていることと、アンケートの回答で 10 代 20 代 30 代が少なくなっていることは関係があるのではないか。高校の図書室にも生徒はなかなか来ず、受験に必要になって慌てて３年生が来るのが実情である。パネル展示についても、もっと面白そうな参加型のものを取り入れるなど、若い世代が来館したくなるような工夫が必要ではないか。

例えば、山形県立図書館では農家と連携したマルシェや芸術大学生とのランタン作り、夜の怪談イベントなど、様々なところとコラボした企画をたくさん行っている。高校の文化祭でも小学生向けのイベントとして、本に出てくるアイテムを使ったゲームを実施し、本自体にも興味を持ってもらうような取り組みを行っている。

→アンケートの回答数自体も前回よりも減っており、入館者自体も減ってきていることから、若い世代の人口減少も影響しているのではと思っている。ただ、アンケート結果で若い世代が減っていることは、若い世代よりも年配の方の方がアンケートに協力的であることが多く、回答者に少し偏りがあるかもしれない。しかし、普段から若い世代に接している委員の意見を真摯に受け止め、これからの参考としていきたい。今、居場所としての図書館も重要視されてきているので、これから工夫して取り組んで参りたい。

●山形県の事例等について情報提供と提案があったが、さらに付け加えて回答することはあるか。

→本日チラシをお配りしているが、県民読書の日（11 月 1 日）関連事業として、「ヒミツの書庫で本借り放題！」という子供向けの参加型イベントを実施する。今後も、県立図書館としてできることから取り組んで参りたい。

●今年から新たに、非来館者を対象にしたアンケートに取り組んだことは素晴らしいと思う。非来館者のアンケート回答で、直接来館型の利用があるのはどういうことか。

→アンケート自体は来館せずに回答しているが、その中で県立図書館を来館して利用したことがあるという人である。

●図書館非利用者に対して、ＳＮＳ等でアンケートを行った訳ではないというか。

→そのとおりである。

●来館者数が話題になっているが、そもそも来館者数はどのようにカウントしているのか。

→２階の閲覧室の入り口にセンサーがあり、そこで閲覧室の出入りをカウントしている。さらに、エントランスホールの新聞コーナーだけ利用して閲覧室まで来ない方もいらっしゃるので、過去に職員がエントランスホールで利用者数をカウントしており、その数字を参考に、閲覧室の出入りした人数とエントランスホール利用者を足し合わせて、来館者数を出している。

●玄関の入り口にセンサーをつければいいのではないか。

→閲覧室のセンサーが本の持ち出し防止のゲートと連動したセンサーであり、移動することが難しい。

●レファレンス職員の体制と、人材育成をどのように行っているか。レファレンス・サービスを向上させたいとは思っているが、市立図書館では専門の職員がおらず、人材育成なども難しいと感じている。

　今年度大曲図書館では、県立図書館と共催でがん情報セミナーを開催したところ、多くの来館者があった。図書館に縁のない方が何かのイベントをきっかけに来館して、本に興味を持ち、図書館利用に繋がることがあるので、そういった取り組みを今後も続けて欲しい。

→レファレンスは専門職員がいるのが理想だが、実際は限られた人員の中でのやりくりしているのが実情である。当館ではカウンターで対応した職員がいただいた質問に回答する形になっており、専門職員は配置できていない。また、人事異動や採用など職員の入れ替わりもあり、レファレンスのレベルを維持していくのは大変だと感じているが、新規職員には館内でのレファレンス研修や国立国会図書館の研修などを受講してもらい、さらにお互いの調査結果を共有するなど、レベルの向上に努めている。実際のレファレンス内容についてはＨＰでも公開しており、また国立国会図書館でも全国の事例を集めたサイトなどもあるので、そういった情報の周知なども含めて、サービスを向上させていきたいと考えている。

（７）協議

秋田県立図書館への要望・提言等について

●特別支援学校は知的障害がある生徒が増えており、教室を確保するのも難しくなっている中、図書室を設けたり、図書コーナーを設けたり、どうにか子どもたちの読書活動の推進を図ろうと各学校でがんばっているところである。聴覚支援学校では、子どもたちは文字の読み方が聞こえないので、この漢字をどう読むのかを確認していくためにも、言語活動の充実として本は重要となっている。そんな中、県立図書館の貸出事業は大変有り難い。報告では、今年度は横手支援学校と秋田きらり支援学校を訪問し、助言活動もされているとのことで、今後も引き続きよろしくお願いしたい。

来館者数の減少が話題になっているが、県立図書館としてどの年代をターゲットにしていくのか。効果的な取り組みを行うためにも、どの年代・層をターゲットにするかを明確にした企画立案に取り組んでいただきたい。

→これまで県立図書館では、市町村立図書館の支援、県内高等学校の学校図書室への支援、直接来館する方に対しては年代別、目的別のコーナーを設け、図書館を利用する県民がどういった目的で来館するのかを考えて、コーナー分けや各ターゲット別のサービスを心がけてきたところである。今後は県内の人口構造の変動も考慮した上で、どういったサービスに重点を置くか、また続けていくのか検討していかなければいけない時期にきていると考えている。

来館者数が話題になっているが、ホームページやデジタルアーカイブなど来館せずに利用する人、図書館に直接来なくとも、その人たちが必要とする情報を届けるアウトリサーチサービスが秋田県の場合、社会状況が変化する中より重要性が増してきているように感じている。その中で、県立図書館として本当に求められている必要性の高い部分を見極めて取り組んで参りたい。

●子どもを本や図書館に繋げるには、実際の体験活動が必要だと考えているので、書庫の見学や読み聞かせはとても嬉しい活動だと思っている。

大人の本離れもあるので、コスパやタイパを考えると、大人にも絵本を読んでもらいたいという企画があれば面白いなと思った。

アンケートの利用目的についての回答で、「子どものため」という回答は、子どもと一緒に利用しているということか、それとも子どものために親が図書館を利用しているということか、分かりにくいと感じた。

来館者数の減少が話題になっているが、私個人は来館者数よりは来館者の満足度が重要だと感じている。

学校でもデジタルか、アナログかという議論にはなるが、オンラインの良さや対面の良さなど様々あるので、選択肢の多様性の確保や、デジタルやアナログのそれぞれの価値付けをしてもらいたい。

●私も数だけに捕らわれると歪みが生じることがあるので、数は無視できないが、満足度については８割を超えており理想的だと思うので、外部や行政の方にも、数よりも質が重要だという意見が委員から出ているということを伝えて欲しい。

「子どものため」というアンケート回答が分かりにくいとの指摘だが、それについてはいかがか。

→「子どものため」という回答が多いのが 30 代 40 代で、実際にカウンターで来館者に接している体感では、子どもを連れて家族で来館される方が多い。家族で来て子どものために本を沢山借りていかれる方が多い。

●一般の人からは見えない活動だが、県立図書館まで来館できない人のためにも、市町村立図書館への支援は重要であると感じているので、今後も充実させて欲しい。

遊学舎に県立図書館コーナーを新たに設置されたことは、これまで県立図書館と接する機会がなかった層にアプローチできるよい取り組みだと思う。さらに図書館のイベントを告知するコーナーを作るなど、図書館の利用が進むような取り組みを進めてもらいたい。

●本日の意見や提案を、今後の運営に活かしていただければと思う。

その他

資料推薦書について、事務局から案内を行った。

（８）閉会